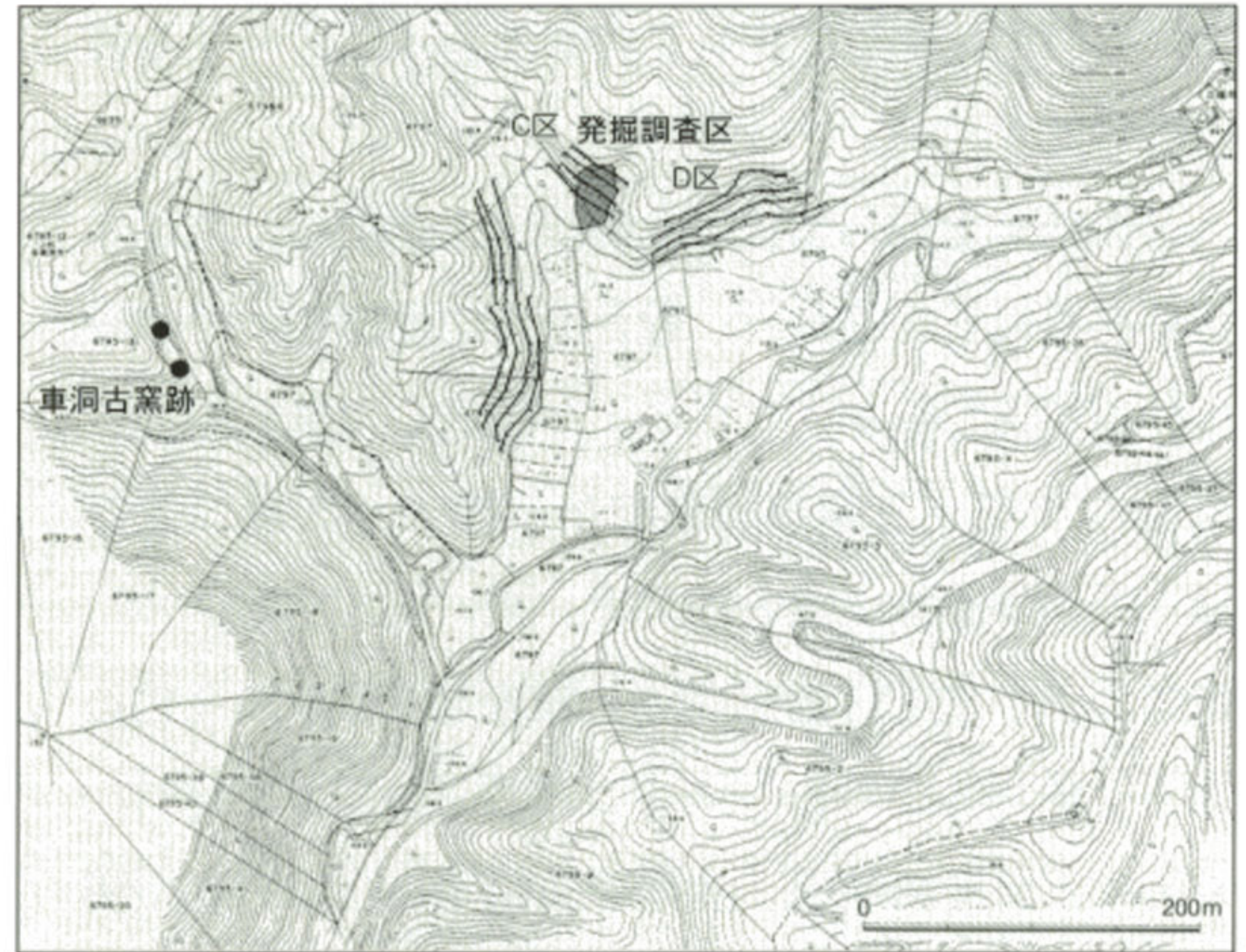




くるま ぼら 各務車洞遺跡

編集 各務原市埋蔵文化財調査センター
発行 各務原市教育委員会
TEL (0583) 83-1123
平成14年2月28日



発掘調査のきっかけ

各務原市各務字車洞には、車洞古窯跡こようせきが早くから確認されていました。その近くに、(仮称)花木公園かぼくが造られることになったため、造成工事を行う範囲について、平成5年6月から12月の期間に緊急発掘調査を実施しました。初めは、古窯関連の遺跡が埋もれていると予想しましたが、結果はそうでなく、縄文時代の土器や石器が出土しました。この遺跡を、各務車洞遺跡と名付けました。

ところで縄文時代は、土器の特徴などから草創期、早期、前期、中期、後期、晩期という、6時期に分けて様々な研究がなされています。各務車洞遺跡から出土した土器は、早期の初め(約9,500年前)という、たいへん古い段階のものです。これまでに、市内で見つかっている縄文土器としては一番古く、発掘調査によって、これほど昔の生活跡をきちんと調べることができたのは、初めてのことです。

周辺の地形

各務車洞遺跡がある場所は、各務原市の最北東部で、人里から少し離れた山奥の土地です。この辺りは、境川さかいがわの上流が谷を削って流れています。その途中で少し広い空間があり、その場所に面している山の南西斜面に遺跡があります。標高150m前後の位置になります。

このような場所にある遺跡は、山で狩猟をする縄文人が、キャンプのような生活をした場所であると考えられます。



発掘調査の様子

出土した土器と石器

縄文土器は、表面に付けられる文様や、土器全体の形などから多くの種類（型式）が確かめられています。それは、土器というものが、同じ縄文時代の中でも時期によって変化し、また地域によっても違うからです。

この縄文土器の型式に、押し型文土器と呼ばれるものがあります。これは、図形を棒に彫刻し、それを土器の表面で転がすことにより連続した文様を付けたものです。各務車洞遺跡から出土した縄文土器は、この押し型文土器の仲間で、楕円文と山形文の二種類があります。楕円文は、楕円を浮き上がらせるように彫刻した棒を、土器の表面で転がして付けたものです。その結果、土器の表面全体には凹んだ楕円文が多く並びます。山形文は、ジグザグを彫刻した棒を回転させ、帯のように縦横に付ける带状施文と呼ばれるものです。一般に、山形文より、凹んだ楕円文の方が少し古い土器であることが知られています。

土器全体の形は、口が大きく開き、底が尖っています。この様な形の土器は、石で囲った炉に突き刺すように固定して煮炊きを行ったと考えられています。

土器の他には、石器が多く出土しました。同じ人達が使っていたものです。石器にも、その用途によって色々な形があります。

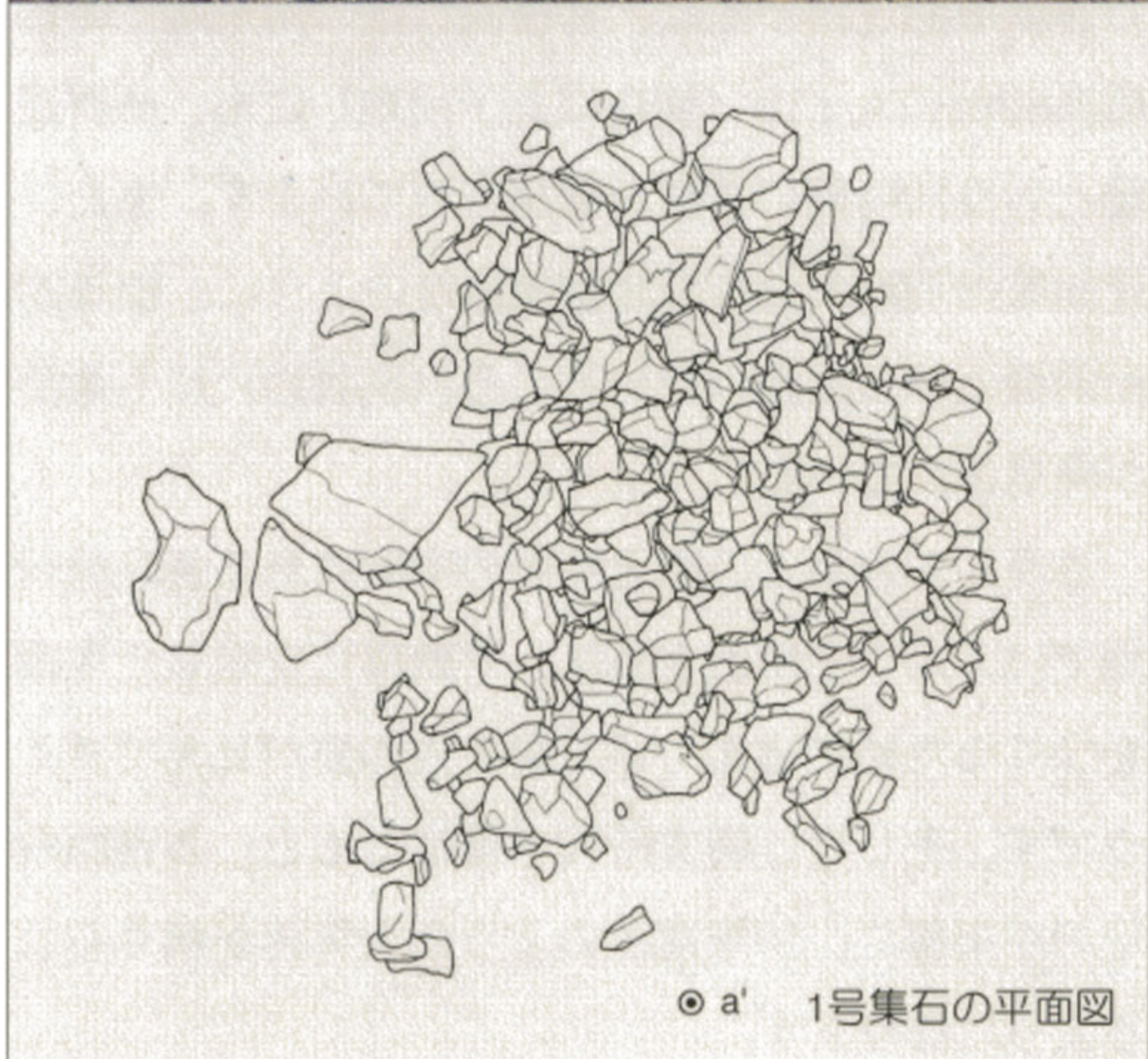


生活の跡(集石)

各務車洞遺跡では、これらの道具の他に生活の跡が見つかりました。それは、石を集めた集石しゅうせきと呼ばれるもので、6ヶ所に確認できました。個々の集石は、近くに集まりながらも間隔を空けて配置されているようです。

集石の石を詳しく観察すると、熱を帯びて赤くなっているものがあります。また、周辺には、焼けた土や炭が多く散らばっています。確かなことはわかりませんが、これらの集石で火を焚いて、肉を焼いたり土器で煮物をしたり、暖をとったりしたと考えられます。現在でも石焼料理があるように、石を熱して行う料理法があったものと思われます。

集石に使われている石材は、砂岩さがんの割れた石(角礫かくれき)とチャートの少し磨耗した石(亜角礫あかくれき)で、付近の崖や谷で採集できるものです。これらが、使用中に熱で弾けて割れ、結果的に石の数が多くなっているようです。その証拠に、同じ集石の中で、割れた石同士が接合します。



○1号集石

石の数：536点

大きさ：直径約1mの円形

特徴：石の下に土坑(穴)がある

○2号集石

石の数：16点

大きさ：長軸約1m20cm、短軸約40cmの楕円形

特徴：石材が全て砂岩で少ない

○3号集石

石の数：184点

大きさ：直径約60cmの円形

特徴：石の下に土坑(穴)がある。

○4号集石

石の数：47点

大きさ：長軸約60cm、短軸約30cmの楕円形

特徴：石の下に土坑(穴)がある。

○5号集石

石の数：569点

大きさ：長辺約1m20cm、短辺約50cmの長方形

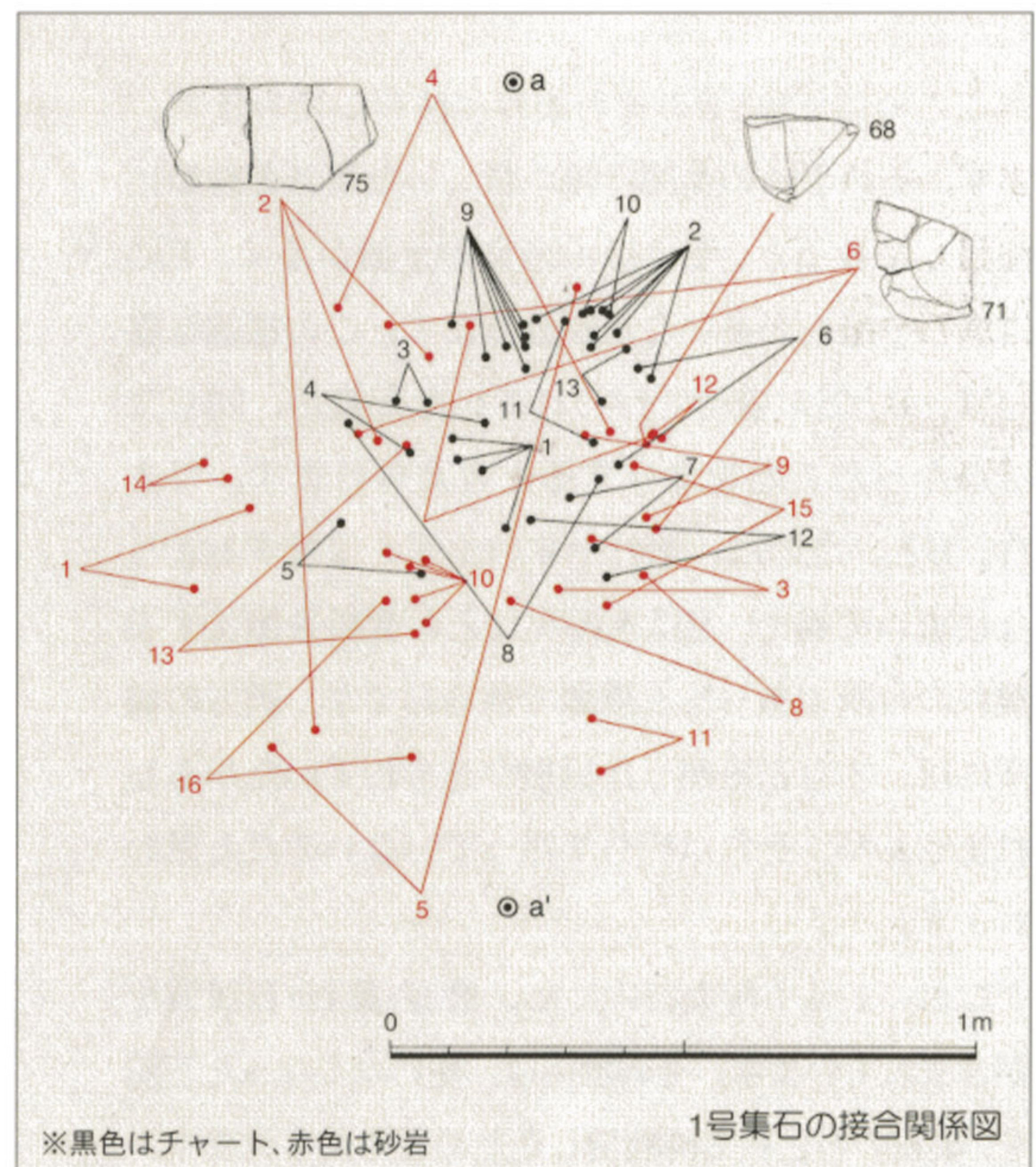
特徴：石の下に土坑(穴)がある。

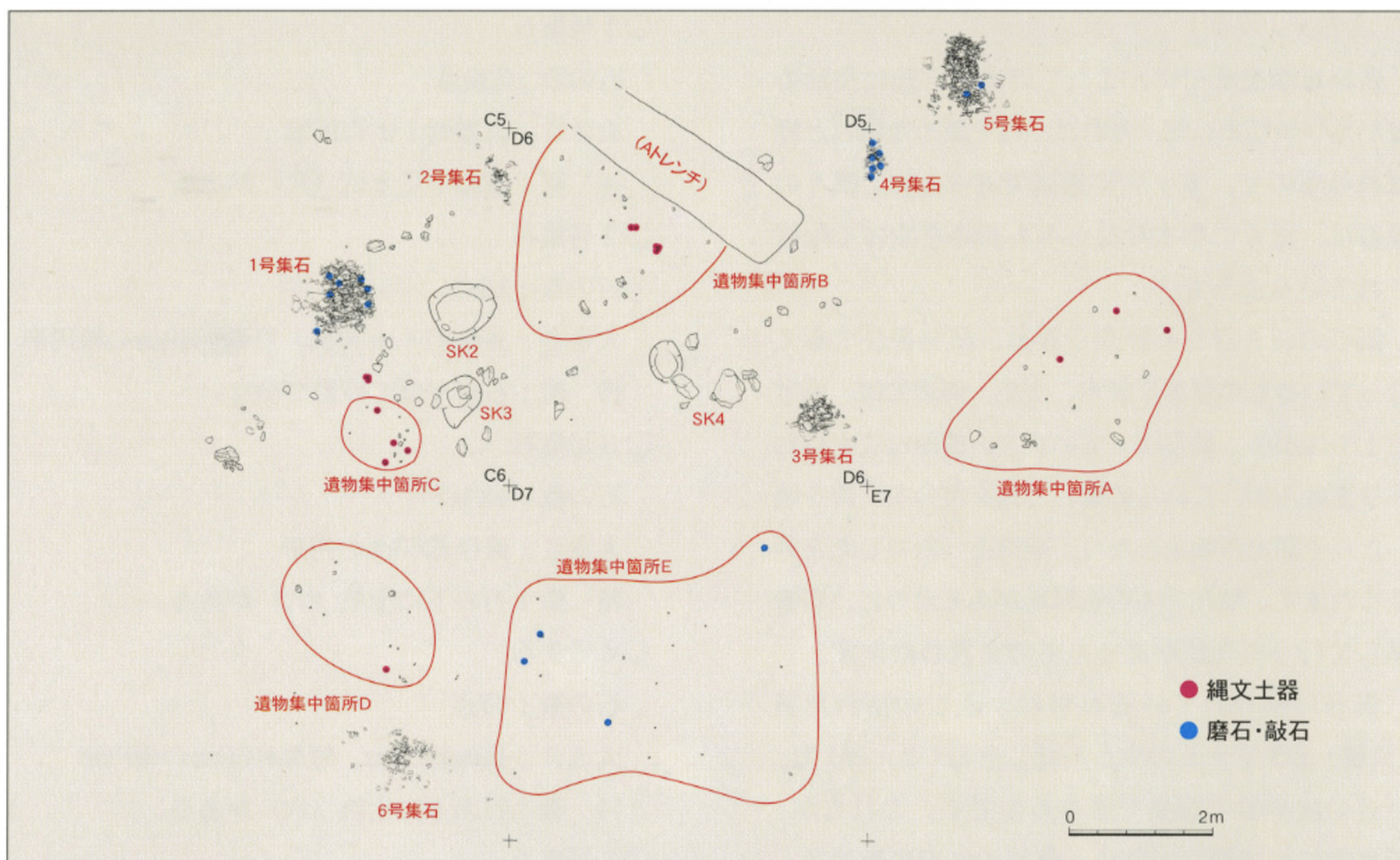
○6号集石

石の数：127点

大きさ：約80cm四方の四角形

特徴：特に無し





土器・石器の分布

ここで、土器や石器と集石の位置関係を見てみましょう。土器や石器は、遺跡の全体に散らばっているのではなく、まとまりをもって分布しています。これは、道具を使う場所が決まっていたことを意味すると思われます。そこで、まとまり毎に遺物集中箇所AからEという名前をつけてみました。

ここでは、BとEのまとまりに注目してみます。まず、それぞれの範囲に残されていた道具の種類に注目してみると、Bには山形文の土器が多く、Eには磨石や敲石が多いことが分ります。この極端な違いは、BとEの場所で行われていた行動が、同じではなかったことを意味すると考えられます。つまり、Bというのは、壊れやすい土器を保管するような住まいの場で、Eは木の実などの食料を加工する離れの台所であったと想像できるのです。両方の場所には、木などを使った屋根が造られていたかもしれませんが、それは朽ちて残っていないのだと考えられます。

なお、1・4・5号集石内にも、磨石・敲石・石皿破片が含まれています。その理由は、使わなくなった石器を、集石の石として再利用したためと考えられます。

ところで、Aのまとまりには、凹んだ楕円文の土器が残されていました。またC・Dのまとまりには、同じ縄文時代でも中期後半の土器が散らばっていました。これは、この土地に長い期間に渡って、人々が何度も訪れていたことを意味しています。

まとめ

岐阜県内を広く見ると、縄文時代早期の押型文土器を出土した遺跡は多くあります。特に山間部に目立ち、当時の人々は標高の高いところで山に深く関わって生活していたようです。各務原市内では、この各務車洞遺跡の他に、各務原台地の南東端にある標高80mの丸子山（現在は丸子団地）にも、植野遺跡という同時期の遺跡が確認されています。また、愛知県丹羽郡大口町の北替地遺跡のように、標高20m前後という土地の低いところ（扇状地）にも遺跡が発見されています。

こうしてみると、山と平野の間にある各務原台地では、山の生活とともに、平野部に安定した集落をつくるために挑んでいく縄文人の姿が見えてきそうです。そして、縄文時代中期になると、各務原台地の中央部に、炉畑遺跡のような大集落が構えられるようになります。